5　高等学校　～交際していた男子他校生と家出した事例～

高１のＤ子は、父親の単身赴任から、母親が自宅と単身赴任先を行き来するようになったため、中学校時代から自宅で一人になることが多くなった。この頃から交際していた別の高１のＫ男と一緒に友人宅を泊まり歩くようになり、時々帰ってくる母親に生活態度のことで厳しく注意されていた。

ある日、Ｋ男の居場所が分からなくなったため、Ｋ男の母親は、Ｋ男の学校に連絡するとともに、Ｄ子と交際していたことを知っていたことから、Ｄ子の学校に状況を話し、Ｄ子の出席を確認したところ、本人から体調が悪いと連絡があり欠席していることが分かった。

Ｄ子の学校では、Ｄ子とＫ男の家庭と連携を図り、警察に相談することとし、家出から１週間後に捜索願を提出した。その後、Ｄ子から「しばらく帰らない」というメールが母親に入ったことや友人情報で横浜に行きたいと言っていたことなどから、道警と県警の連携をお願いした。

サインの発見

- 家庭での変化の察知
- 学校での変化の察知
- 悩み調査（入学当初に実施）
- 面接

1　家庭や学校での生徒の変化を見逃さない

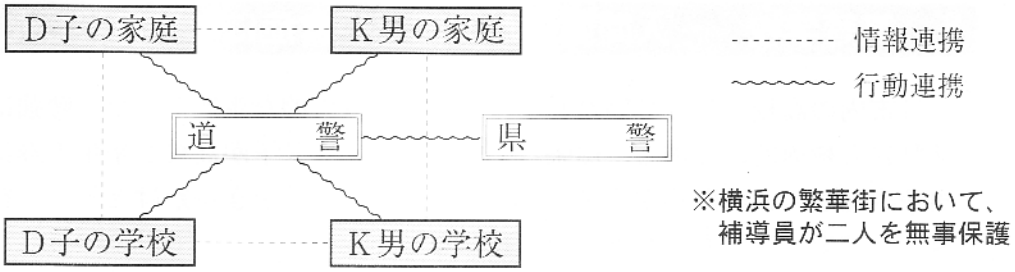
家庭での発見	・子どもとの会話が少なくなり、電話連絡が取れない日が多くなる。 ・母親を避けるようになったり、反抗的な言動が目立つようになる。 ・帰宅時間が遅くなったり、外泊するようになる。
学校での発見	・校内の友人が少なく、校外の友人とのかかわりが多くなる。 ・遅刻や早退が多くなり、時間にルーズになる。 ・授業中の居眠りや服装、言葉遣いの乱れが目立つようになる。 ・「悩み調査」に、家庭や学校生活の項目に悩みが見られる。 ・担任との日常会話の中で、家庭の話題には曖昧な返答をしていた。

情報収集の工夫

- サインの見逃し
- 対応の遅れ
- 他校と連携
- 家庭と連携
- 友人からの情報収集

2　問題行動の把握のための事前・事後のかかわり

事　前	事　後
・入学当初、出身中学校との情報連携が十分に行われず、生徒や家庭の状況を的確に把握していなかった。 ・生活の乱れに気付いていながら具体的な対応を行わなかった。 ・「悩み調査」の実施から、家庭等での悩みが見受けられ、個人面談を実施する予定であった。	・他高校との情報交換を積極的に進め、問題行動の把握に努めた。 ・校内において、少ないながらも友人から情報を収集するとともに、Ｄ子とＫ男の家庭と連携を図り、警察に相談することを決めるなど問題行動の解決に努めた。



※【本校における相談活動等】

・入学当初の出身中学校との懇談　・「悩み調査」を基にした個人面談　・家庭訪問
・三者（生徒、保護者、担任）懇談　・スクールカウンセラーによるカウンセリング

3　帰宅後の指導の実際

具体的な指導の展開

・子どもと真正面に向き合う

(1)家庭への指導

○家出した子どもを迎え入れる親の在り方として

・今までの養育態度や家庭生活等を振り返り、再出発する気持ちで子どもとかかわっていくこと。
・家出先や理由を根ほり葉ほり聞き出そうとしたり、頭から叱りつけたりせず、相互理解の視点をもって真正面から子どもと向き合うこと。
・時間をかけて親子の信頼関係を修復すること。

・子どもへの支援

(2)子どもへの支援の視点

○計画的に家庭訪問を行い、生徒の状況や家庭との信頼回復に当たる。
○当分の間は、子どものストレスなどを受け入れる子ども寄りの立場を示しながら、家庭と子どもとのパイプ役となり、ねばり強く支援する。
○家庭の状況に回復が見られない場合は、子どもの自立心を育む視点を強く踏まえた支援なども考えて対応する。

■本事例におけるポイント■

D子の前兆行動（サイン）	学校の対応等
○時間にルーズになる。 ○学習に集中できない。 ○級友にとけ込まない。 ○校外の友人とかかわる。 ○家庭の話題に曖昧な回答をする。	○前兆行動（サイン）を受け止めてはいたが、具体的な対応ができなかった。 ○家出発覚後は、家庭・警察と連携を図り、積極的な対応ができた。 ○帰宅後の指導方針を二次的な非行防止の観点でとらえた。 ○両校連携のもと、継続的な家庭訪問等を行うなどして、生徒のサポート体制を整備した。